竹村公太郎

Takemura Kotaro

日本史の謎は「地形」で解ける

PHP文庫

9784569760841

ISBN978-4-569-76084-1

C0121 ¥743E

1920121007438

定価：本体743円（税別）

日本史の謎は「地形」で解ける

竹村公太郎

京都が日本の都となったのはなぜか。頼朝が狭く小さな鎌倉に幕府を開いたのはなぜか。関ヶ原勝利後、家康がすぐに江戸に帰ったのはなぜか。日本全国の「地形」を熟知する著者が、歴史の専門家にはない独自の視点で日本史の様々な謎を解き明かす。歴史に対する固定観念がひっくり返る知的興奮と、ミステリーの謎解きのような快感を同時に味わえる1冊。『土地の文明』『幸運な文明』を改題し、再編集。

PHP文庫

日本史の謎は「地形」で解ける

竹村公太郎

PHP文庫

はじめに

◎上から目線

昭和45年に大学を卒業して建設省のダム現場に配属された。栃木県の鬼怒川のダム現場を皮切りに、雪深い福島県会津のダム、首都圏の神奈川県丹沢のダム現場を経験した。建設行政では東京、新潟、名古屋、広島に勤務し、全国各地の生活を経験してきた。

この20年間の転勤生活で、全国各地の地形と気象の多様性に何度も驚かされた。日本列島の中央には脊梁（せきりょう）山脈が走り、そこから無数の川が流れ下り、少し車で走ると地形も気象もがらりと変化していく。この南北３０００㎞の列島が一つの国を形成している不思議さに包まれたこともあった。

その後、市民団体やマスコミから自然破壊と激しく非難されていた長良川河口堰（ながらがわかこうぜき）問題のチームに投入された。与えられた任務は、ジャーナリストや知識人と会い、長良川河口堰事業を説明して理解してもらうことであった。やりがいのある任務で

あり、毎日眠るのも惜しんで仕事に向かっていた。

ある時、辛口で知られている社会評論家に説明することとなった。その方はひと通り長良川河口堰の説明を聞いた後、「やっと長良川河口堰が問題になった理由が理解できた。竹村君の今の30分の説明の中で『長良川流域の人々の生命と財産を守る』という言葉が3回も出てきた。そのような〝天下の印籠(いんろう)が見えないか〟という態度が、この事業がこじれている最大の理由ということが良く理解できたよ」と言って席を立たれてしまったのだ。

全ての著作を読んでいたほど尊敬するその社会評論家に打ちのめされてしまった。私はいかに上から目線で説明していたか。人々の心に届かない言葉で強引に説得しようとしていたか。その社会評論家は鋭い言葉でそれを私に思い知らせてくれたのだ。

43歳の時であった。

◎下部構造からの視点

心が落ち込んでも仕事は続けなければならない。毎日のように長良川河口堰の説

明をするが、もう「人々の生命財産を守る」という印籠は出せなくなっていた。この印籠は、上から目線で人々を説き伏せるものだと知ってしまった。その印籠を封じて長良川河口堰を説明するという難しい作業となった。

半年後、ある高名な文学者に説明することとなった。その別れ際に、竹村さんの説明は分かりやすいですね、と言われた。そのような言葉をかけてもらえるとは夢にも思っていなかった。私は緊張して長良川の地形と過去の災害と河口堰の機能を説明しただけであった。

その帰路で気がついた。インフラ屋の私はインフラ、つまり下部構造を徹底的に説明すればよい。思想、哲学、社会、宗教、文学などの上部構造に手を出さずに、自分が得意な地形と気象の分野を表現すればいい。

地形と気象だけは人に負けないほどの知識と経験がある。その地形と気象の事象を丁寧に拾い出して提示していく。その地形と気象の材料を使って他分野の人々と会話をしていく。それが私の役目であると気がついた。

◎信長、秀吉、家康が欲した難攻不落の地形

7年間の激務の後に大阪へ転勤となった。勤務場所は上町(うえまち)台地の先端の大阪城の直近であった。昼休みに大阪城を散歩していると、「本願寺跡」という看板があった。

本願寺が大阪城の跡にあった？　本願寺は京都ではないのか？

京都の東西の本願寺は後から建造され、本願寺の本拠地はこの大阪城跡だったことを、関東育ちの私は知らなかった。

石山本願寺は、16世紀の世界最強軍団を率いる織田信長と11年間も戦い、ついに負けることはなかった（最終的にはこの地からの退去を条件に和睦(わぼく)）。彼らの拠点がこの上町台地の大阪城の跡にあったという。戦国時代の上町台地の周辺の低地は湿地帯であった。当然、そのことを土木の専門家の私は知っていた。

ここを攻める兵隊たちが上町台地に近づけば、足は泥に取られ身動きできなくなり、台地の上から矢で射られ放題となる。

本願寺が十年以上も持ちこたえたのは、本願寺の信者たちに強い宗教心があった

からと歴史では学んできた。しかし、この本願寺跡の地形を見詰めていると、彼らは難攻不落の地形に陣取ったから負けなかったのだということが見えてくる。

織田信長はこの地形を奪おうと11年間かけた。その後、豊臣秀吉はこの地形を利用して難攻不落の大坂城を建造して天下を制した。その後、徳川家康はいかに秀吉の難攻不落の大坂城を陥落させるかに腐心した。

上町台地に立って地形を見ていると、戦国時代の3大英傑の信長、秀吉そして家康が、この難攻不落の土地を巡って血みどろの戦いをした意味がひしひしと伝わってきた。

私の中で、地形と歴史の新しい物語が生まれていった瞬間であった。

◎地形を見ると、歴史の定説がひっくり返る

地形を見ていると新しい歴史が見えてくる。この驚きが、日本各地の地形と気象を改めて見直していく動力となった。ところが、この作業は勇気がいる作業となった。

何しろ地形や気象から見る歴史は、今まで定説と言われていた歴史とは異なる。

このような説を発表すれば、素人が何を言うか、と歴史の専門家たちからの叱責(しっせき)を覚悟しなければならない。

しかし、地形と気象は動かない事実である。そのぶれない地形と気象の事象をどう解釈して、どう表現するかは各自の自由である。その解釈の根拠としてぶれない地形と気象を共有していれば、議論は拡散せず、客観的にある方向に向かっていく。

そのような覚悟で、地形から解く歴史の謎を書き進めたものがこの文庫本にまとまった。

この文庫本のまとめ作業は楽しく進んだ。何しろ編集者の中村康教さんがとても面白がってくれたからだ。

これまで全国各地で多くの人々と出会い、その土地で酒を飲み交わしながら聞いた話も、この文庫本の糧(かて)になっている。

全国各地でお会いした人々と全国各地の地形に心より感謝したい。

日本史の謎は「地形」で解ける

目次

はじめに

第1章

関ヶ原勝利後、なぜ家康はすぐ江戸に戻ったか

巨大な敵とのもう一つの戦い

「江戸への転封命令」に家臣たちが激怒した理由　23／二つの関東平野　24
関東平野ではなく関東「湿地」だった　26／家康が見たもの　28
関東一帯を歩いて探し当てた「宝物」　30
日本の歴史を変える工事に着手　32／家康帰京の謎　33
日本史上、最大の国土プランナー　36

第2章 なぜ信長は比叡山延暦寺を焼き討ちしたか

地形が示すその本当の理由

逢坂山トンネルの重苦しさ 43／京の鬼門 45／「頸動脈」地形 46
恐れる桓武天皇 48／比叡山延暦寺焼き討ち 49／地形から見た歴史 51
地形を恐れる信長 53／比叡山の僧兵 54

第3章 なぜ頼朝は鎌倉に幕府を開いたか

日本史上最も狭く小さな首都

鎌倉の疑問 59／伊豆の小島 61／海上の頼朝 63／鉄壁の鎌倉 65
頼朝の閉じこもり 67／恐れる頼朝 69／平安京の秘密 71
疫病という敵 74／謀殺された頼朝 76

第4章

元寇が失敗に終わった本当の理由とは何か

日本の危機を救った「泥」の土地

車文明が空白の日本　81／　牛馬を家族にした日本人　83
牛馬を制御する民族　84／　大陸の暴力　86
進軍できないモンゴル軍　88／　泥と緑の国土　89
海路の東海道　91／　泥の濃尾平野　92
8世紀前の日本とベトナムの共同戦線　95

第5章

半蔵門は本当に裏門だったのか

徳川幕府百年の復讐①

既視感　101／　広重の絵　102／　半蔵門からお出になった天皇陛下　104
半蔵門の謎　105／　半蔵門の土手　108／　半蔵門は本当に裏門か？　112

地図の錯覚 114／甲州街道という道 117
家康が見抜いた「難攻不落の地形」 120／歴史に埋もれたもの 122

第6章

赤穂浪士の討ち入りはなぜ成功したか

徳川幕府百年の復讐②

麹町の謎 128／平河天満宮の謎 130／赤穂浪士の潜伏先 132
密偵の時代 134／麹町潜伏の謎 136／吉良邸、本所(ほんじょ)へ 138
吉良邸移転の謎 140／忠臣蔵の最終幕 142

第7章 なぜ徳川幕府は吉良家を抹殺したか

徳川幕府百年の復讐③

矢作川河口の歴史図 148／矢作川の確執 153／命をすり減らす戦い 154
源氏の名門、吉良家 156／1605年まで待った家康 157
空白の3年間 159／世襲の征夷大将軍 160
屈折の100年 162／復讐のエネルギー 163

第8章 四十七士はなぜ泉岳寺に埋葬されたか

徳川幕府百年の復讐④

高輪大木戸から泉岳寺へ 167／泉岳寺の立札 170

泉岳寺を創建した者　172／泉岳寺の交差点にて　174
高輪大木戸と品川宿の間　176／泉岳寺というテーマパーク　179
アイデンティティーを生んだ物語　180／高輪大木戸の移動の謎　182
徳川幕府の最後の仕掛け　183

第9章

なぜ家康は江戸入り直後に小名木川を造ったか

関東制圧作戦とアウトバーン

「塩の道」小名木川　187／小名木川のなぞなぞ　189／なぞなぞから謎へ　192
塩のために造ったのか？　194／小名木川の絵　196
1590年の天下統一　198／関東の湿地　200／アウトバーン　202
佃島の秘密　203

第10章 江戸100万人の飲み水をなぜ確保できたか

忘れられたダム「溜池」

広重の《虎ノ門外あふひ坂》 209／「溜池」 212
玉川上水の完成以前 213／江戸の都市づくり 215
江戸文明を支えた堰堤 217／消えたダム 218
収奪する東京 219／東京の人々が失った「下部構造」と「日本人の心」 221

第11章 なぜ吉原遊郭は移転したのか

ある江戸治水物語

浅草寺の縁起絵 225／江戸の拠点・浅草 227
江戸繁栄の鍵は荒川の治水 228／江戸の治水工事 229
最も安全な浅草 230／「振袖火事」後の都市改造 232

江戸を守る遊水池システム 233／いかにして堤防を維持するか？ 234
吉原遊郭の移転 237／文化が守るインフラ 238

第12章 実質的な最後の「征夷大将軍」は誰か

最後の〝狩猟する人々〟

旧約聖書 243／農耕人の圧迫の証拠 245／日本列島の稲作共同体 247
稲作共同体の侵略 249／最後の〝狩猟する人々〟 250
山と海の中国地方 253／狩猟民族の物的証拠 255／毛利の変身 257
くすぶる「攘夷」 259

第13章 なぜ江戸無血開城が実現したか

船が形成した日本人の一体感

広重の《神奈川・台之景》 265／つまらない『東海道五十三次』 266
見落としていたもの 267／広重の驚嘆 269／モノを共有した日本人 271

日本列島の分断された土地 272／モノは情報 273／大政奉還 274
勝・西郷会談 277／アイデンティティーを育んだのは「船」 278

第14章 なぜ京都が都になったか

都市繁栄の絶対条件

赤坂見附 283／文明の中心は「交流」 284
「日本の都」探しシミュレーション 285／日本列島の中心 287
京都にたどり着く 289／「交流軸は栄える」 292／人の交流は情報の交流 295

第15章 日本文明を生んだ奈良は、なぜ衰退したか

交流軸と都市の盛衰

箱根駅伝の最終コースの変更 299／ホテル・旅館客室数全国最低の奈良 300

思いつき 303／奈良の人口の変遷 305／あきらめた問い 307
日本文明の誕生 309／1000年の長い眠り 312／奈良の目覚め 314

第16章 なぜ大阪には緑の空間が少ないか

権力者の町と庶民の町

テヘランの緑 321／パーレビ王朝の遺産 323／北京の緑 324
東京の地下鉄マップ 327／権力者の緑地 328／緑のない大阪 331
権力に対峙した「堺」 332／自然を守るもの 334

第17章 脆弱な土地・福岡はなぜ巨大都市となったか

漂流する人々の終の棲家

謎を解くきっかけとなった本 339／飢人地蔵（うえにんじぞう） 340／不自然な福岡 342

危険な福岡 343／食糧とエネルギーがない福岡 346／もらい水 349
B型肝炎ウィルスの亜種分布 350／ゴミ漂着分布図 353
情報の塊が流れ着く大交流軸 355

第18章 「二つの遷都」はなぜ行われたか

首都移転が避けられない時

文明の存続 359／日本の二度の遷都 360／謎の平安遷都 362
奈良盆地が都になる必然 364／変貌した奈良盆地 367
湿地に囲まれた厄介な江戸 369／関西を嫌った家康 371
リアルでない東京遷都 375／リアルな北京遷都 376

本文デザイン◎印牧真和

第1章

関ヶ原勝利後、なぜ家康はすぐ江戸に戻ったか

巨大な敵とのもう一つの戦い

１６００年、徳川家康は天下分け目の関ヶ原の戦いで勝利した。３年後の１６０３年に征夷大将軍となった家康は、さっさと江戸に帰り、江戸で幕府を開府した。

この江戸開府の事実はよく知られていて、これがおかしいなどと疑問を唱える人はいない。しかし、この江戸開府には大きな謎が横たわっている。

征夷大将軍の称号を受けたとはいえ、この時点で家康が天下を統一したといえる状況にはなかった。豊臣家の当主の秀頼とそれを守る淀君は、大坂城に君臨していたし、その豊臣家に忠義をつくす大名や、虎視眈々（こしたんたん）と天下を狙っている有力大名は全国に数多くいた。

それなのになぜ、家康は京都や名古屋など、実態的に天下を把握できる地に本拠を置かなかったのか？　なぜ箱根までも越え、京都から５００㎞も東の大いなる田舎の江戸に引き返してしまったのか？

歴史の専門家は人文社会の面から江戸開府に光を当てている。しかし、私は地理や地形の面からこれを見ていく。そうすると、今までと異なった新しい江戸開府の物語が浮かび上がってくる。

「江戸への転封命令」に家臣たちが激怒した理由

1590年、家康は豊臣秀吉に江戸への転封を命ぜられた。関ヶ原の戦いが始まる10年前のことだ。

家康は生涯においてさまざまな辛酸をなめるが、なかでもこの江戸転封の苦しさ、悔しさは一位二位を争うものであった。

家康は1583年に甲府城の建造に取りかかり、ほぼ完成させていた1590年に江戸行きを命じられたのだ。当時の甲府は、西日本と東日本そして東海の静岡との重要な結節点であった。秀吉は甲府から家康を追い出した後、織田信長の遺児で秀吉の養子の羽柴秀勝をこの地の責任者に当てたし、江戸時代を通して徳川幕府は甲府を直轄地にしたほど重要な土地であった。

江戸転封の名目は、北条氏討伐の先鋒をつとめた家康に関東六カ国をつかわすから江戸に行け、というものであった。この命令に家康の家臣たちは激昂（げきこう）したと伝わっている。

何故、この江戸転封がそれほどひどい扱いだったのか？　何故、それほど徳川の家臣たちは激昂したのか？

関東は北条支配が長く続いたので、ここを統治するのが大変だった、という解釈がある。

私は違った解釈を持っている。

それは「江戸は手に負えないほど劣悪で、希望のない土地だった」からだ。

二つの関東平野

以前、気候変動の議論の一環で「海面が上昇すると未来の日本列島はどうなるか？」を知りたくて、コンピュータで海面を5m、10m、30mと上昇させた図を作った。

これらは面白半分の想像図だったが、海面上昇5mのケースだけは単なる想像ではなかった。かつて、日本周辺の海面は、今より実際に5m高かったのだ。

図1が現在の関東の陰影図で、**図2**が海面を5m上昇させた時の関東の陰影図で

図１　現在の関東

図２　縄文前期の関東（海面５ｍ上昇）

6000年前には海面が５ｍほど高かったので、海は関東地方の奥深くまで入り込んでいた。　提供：一般財団法人日本地図センター

ある。

約６０００年前の縄文前期、大気温は現在より高く、海面は数メートル上昇していて、海は関東の奥まで侵入していた。これが「縄文海進」である。コンピュータのおかげで、その姿をこのようにリアルに見られるようになった。

縄文時代の海岸線を知るには、貝塚分布を調べる方法もある。貝塚は海辺にあるので、その分布を見ると当時の海岸線が浮かび上がってくる。その関東地方の貝塚分布も、この**図２**の海岸線と一致している。

それにしてもショッキングな図だ。

横浜市、川崎市、千葉県の海岸部はもちろん、東京の東半分から埼玉県にかけての関東南部が海になっている。その海は、現在の埼玉、栃木、千葉三県の境が接する久喜市の旧栗橋町まで北上していた。

「関東平野は縄文時代には海の下だった」

この地形図を見ていると、江戸開府の新しい物語が誕生してくる。

関東平野ではなく関東「湿地」だった

図2を見て気がつくことがある。それは「関東には二つの流域があった」ことである。

関東平野といえば利根川である。現在の利根川は北関東の山々からの支川を集めて銚子から太平洋に流れている。関東平野は利根川が運ぶ土砂と火山灰が堆積した沖積平野、と学校で習ってきた。現在の地理院の地図を見ても、関東平野は利根川流域そのものである。

しかし、この**図2**の関東の様相はまるで違う。

関東は二つの流域で構成されている。太平洋へ流れ出る鬼怒川、霞ヶ浦の流域と、もう一つ東京湾に流れ込む利根川、荒川流域だ。

この二つの流域を分けているのが、現在の松戸市、柏市、流山市、野田市へ続く千葉と埼玉の県境にある下総台地である。

縄文時代の南関東一帯は、東の下総台地と西の武蔵野台地に挟まれた盆地状の底にあり、利根川、渡良瀬川、荒川が合流して大きな河口部を形成していた。関東北西部の屏風のように連なる山々に降った雨は、この低地の底の南関東に向かって流れ込んでいた。

1590年、徳川家康が江戸に入った時には海面は下がり、海岸線はすでに沖の方に後退していた。その海が引いた跡に、利根川が江戸湾（現・東京湾）に向かって流れ込んでいた。その利根川の運ぶ土砂が堆積して関東平野が顔を現わしていた。しかし、この広大な関東は現在のような平野ではなかった。

かつて海だった低地は水はけが悪い。排水ポンプなどない時代、ひとたび雨が降れば水は行き場を失い一面に溢れていた。さらに、利根川、渡良瀬川、荒川が流れ込んでいたので、この一帯は何日間も何カ月間も浸水したままの土地であった。

当時の関東は「平野」ではなく「湿地」であった。

家康が見たもの

平安から鎌倉時代にかけ、秩父一族の豪族の江戸氏がこの地を開発した。室町時代、扇谷上杉家の家宰の太田道灌（どうかん）が江戸に城郭を築造した。そこは武蔵野台地の東端の海に面した小高い丘の上であった。現在の皇居の場所である。

応仁の乱からの戦国時代に関東一帯を制したのが北条氏であった。１５２４年、北条氏は上杉氏を追放し江戸城郭も支配した。

この時代、東北日本と西日本を結ぶルートは2ルートあった。一つは、今の福島から栃木、北埼玉、群馬の北関東の陸路ルートである。もう一つは、福島から茨城、千葉を南下し、房総半島から船で西に向かう海路ルートである。

江戸湾の奥に位置する武蔵野台地の東端の江戸は、北関東の陸路ルートから外れ、太平洋の海路ルートからも外れていた。江戸が人のまばらな寒村であった理由は、この二つのルートから外れていたことにある。

１５９０年に家康が江戸城に入った、といってもそれは荒れ果てた砦であった。天下人の秀吉と雌雄を争う家康が入るような城ではなかった。

それ以上に、江戸城郭から見渡す風景は、凄まじいほど悲惨であった。見渡す限りヨシ原が続く湿地帯であり、雨になれば一面水浸しになる不毛の地であった。

秀吉による江戸転封命令が、徳川家にとっていかに我慢ならない仕打ちであったか。その理由は、この関東が途方もなく劣悪で使い物にならない土地だったからだ。

歴史家たちが言うように「家康の武将たちが激昂したのは、北条氏の勢力が残る土地へ行かされたから」ではない。そのような理由で、家康の武将たちが激昂するわけがない。残党を成敗するのが彼ら武将の役目であり、血に飢えた戦国武将たちは喜んで戦いに向かっていったはずだ。

江戸に入った時、彼らが目にしたものは、何も育たない湿地帯が延々と続き、崩れかけた江戸城郭だけがぽつんとある風景であった。彼らはこの荒涼とした風景に驚愕し圧倒され、この地に未来の希望を見出すことができなかったのだ。

その絶望感から徳川家の家臣たちは心の底から怒ったのだ。

❖――関東一帯を歩いて探し当てた「宝物」

家康は激昂する武将たちをなだめ、荒れ果てた江戸に入ったと伝えられている。家康はこの粗末な江戸城郭に入ったが、城の大修復や新築には取り掛からなかった。江戸城の本格建築に着手するのは関ヶ原の戦いの後であり、五層の天守閣の江戸城が完成するのは3代将軍家光の時代であった。

また、江戸の町づくりに本格的に着手するのも、関ヶ原の戦いの後である。

では1600年までの間、家康は一体何をやっていたのか？

この時期、家康は鷹狩りと称して、関東一帯を徹底的に歩き廻っていた。この現地踏査は、後年の検地や知行割などの政策で生かされていった。しかし、それ以上に、これは歴史的に重要な意味を持つこととなった。

家康はこの関東の現地踏査で「宝物」を探し当てていた！

それを手に入れれば、間違いなく天下を確実にする代物であった。さらに、その

宝物はまだ誰にも発見されていなかった。

その宝物とは、日本一広大で、日本一肥沃で、日本一豊富な水がある温暖な「関東平野」であった。

3000年前、日本人は米を手に入れた。米は何年間も貯蓄でき、容易に計量でき、富の交換の基準となった。弥生時代以降、日本人の富は米であり、米を獲得することが権力を握る方法となった。

この関東は、その米を生み出す宝の土地であった。しかも、この宝は誰も手をつけてない処女地であった。なぜなら、その宝は関東の湿地の下に隠れていたからだ。

家康は湿地の下に隠れている宝の「関東平野」を見抜いた。

今この地には利根川、荒川が流れ込み、水はけが悪く、雨のたびに浸水する劣悪な土地である。しかし、この利根川を遠くへバイパスさせ、水はけさえ良くすれば、ここは肥沃な水田地帯となる――。

宝物は発見したが、やらねばならないことがあった。

広大な湿地帯を乾いた土地にするという、日本史上に例のない大規模な大地改変

の課題が立ち塞がっていた。

家康が克服すべき強大な敵、戦うべき新たな敵、それは利根川であった。その敵を征服すれば、他大名を圧倒する富を獲得し、天下は自動的に転がり込んでくる、と家康は看破した。

日本の歴史を変える工事に着手

1590年に江戸に入り1600年の関ヶ原の戦い以前、家康は関東一帯の調査に引き続いて二つの工事に着手していた。

一つが有名な1592年の日比谷入江の埋立てである。近くの神田山を削って江戸城下を取り巻く湿地帯を埋め立てる。埋立地に武士たちを住まわし、埋立地を沖へ押し出し、舟の接岸の水深を確保するものであった。

これは江戸の中心で行われたので、江戸都市建造の代表として伝えられている。

実は、この江戸湾埋立てという華々しい工事の陰で、日本の歴史を変える根幹的な工事が着手されていたのだ。

１５９４年、江戸から北へ60㎞も離れた川俣（現在の埼玉県羽生市の北部）で人知れず着手されていた。それは「会の川締切り」と呼ばれる河川工事であった。家康はこの工事を極めて重要なものと認識していた。その証拠に、家康は四男・松平忠吉を工事責任者として今の埼玉県行田市の忍城の城主に据え、利根川の治水と関東の新田開発に専念させる体制を構えた。

この「会の川締切り」は湿地の関東を乾陸化する第一歩であった。これにより、気の遠くなる自然との闘いの緒戦が切って落とされた。

しかし、１５９８年豊臣秀吉が世を去り、天下を賭けた人間同士の戦いが始まろうとしていた。そのため関東での自然との戦いは、いったん中断されてしまった。

家康帰京の謎

１６００年、関ヶ原の戦いで家康は勝利した。天下は家康のものになろうとしていた。戦後、家康は京都伏見に居を構え、征夷大将軍の称号を得るため朝廷工作を展開し、１６０３年、家康はやっとそれを得ることができた。

ここで、大きな家康の謎が発生する。

家康はその称号を授かると、さっさと江戸に帰ってしまったのだ！

１６０３年、江戸幕府の開府というのは、この征夷大将軍の家康が江戸に帰ったことを指している。江戸城に「江戸幕府」という看板が掛けられたわけではない。家康が江戸に帰ったのが１６０３年だった。

この時期、江戸に帰るのは危険な選択であった。

なぜなら、関ヶ原の戦いで豊臣家が滅んだわけではなかったからだ。関ヶ原の戦いは、形式上、家康が石田三成という反乱軍を征伐したに過ぎなかった。

豊臣家の当主の秀頼とそれを守る淀君は、大坂城に君臨していた。さらに、その豊臣家に忠義をつくす大名や、虎視眈々と天下を狙っている有力大名は全国に数多くいた。

九州の島津家や細川家、中四国の毛利家や長宗我部家、近畿から北陸には真田家や前田家、東北には伊達家など油断できない有力大名が力を誇示していた。

それから10年後の１６１４年の大坂の陣でやっと豊臣家は滅び、徳川政権が磐石となったのである。この10年間は、まだ天下がどう転ぶか分からない微妙な時期で

あり、本当に天下を制する気なら駄目押しをする必要があった。

関西には、豊臣家が君臨する大坂城と権威の朝廷の京都御所があった。関西は、全国の大名を牽制する重要な地理を占めていた。さらに関西は、豪商が活躍し、国内、国外の物資や情報が集積する中心地でもあった。関西は、日本統一にとって不可欠な要の地であり、戦国時代は誰がこの関西を制覇するかの戦いであった。

家康はその権威と富と情報の関西をさっさと離れてしまった。それも箱根を越えて、京都から東へ５００kmも離れた大いなる田舎の江戸に。

歴史の専門家は「この時期、豊臣家の力はいまだ隠然と存在していた。家康は一気に力で天下を制圧するのではなく、豊臣家の力を徐々に削いだうえで滅ぼすという迂回した天下取りを狙った。そのために関西から離れた」という解説をしている。

しかし、これは歴史の結果の後付け解釈である。もし家康がそのような理由で関西から離れたければ、名古屋という絶好の地があった。さらに、三河や静岡という地でもよかった。また、かつて自分で城を築造した甲府もあった。これらの地なら理解できる。しかし、江戸は日本の文明の中心からあまりにも外れていた。

かつて家臣たちが激昂して嫌がった不毛の湿地の江戸、その江戸にわざわざ家康は戻ってしまった。

日本史上、最大の国土プランナー

家康には戦いが待っていたのだ。

家康は一刻も早く江戸に帰り、戦いを再開させたかった。その闘いは自然との闘いであった。利根川の暴れる水を、銚子に向けてしまえば、広大な新田が手に入る。

50年間、家康は天下を獲得するため人の血を流し戦ってきた。今度は、その天下を治めるため、自然との闘いを開始する。この戦いは一筋縄ではない。今まで以上の年月と多くの人の汗を流すこととなる。

家康に残された人生の時間は少なかった。

江戸に帰った翌年の１６０４年、後に「お手伝い普請」と呼ばれる制度を編み出した。これは諸大名を動員し、彼らの財力や人材を利用して大土木工事を行うもの

であった。このお手伝い普請で利根川との戦いが再開された。

中断していた中条堤築造の再開、赤堀川の掘削開始、元荒川の締切り、荒川、鬼怒川、小貝川の付替え、江戸川開削など次々と大規模河川工事が進められた。

そして遂に１６２１年、利根川と西の流域を結ぶ７間（約13ｍ）の赤堀川が初めて開通した。**図２**の○印の下総台地の一番狭い部分、今の栗橋と関宿の間を開削したのだ。

この台地の開削によって、利根川が太平洋とつながった。家康の「会の川締切り」から30年目、江戸幕府は３代将軍家光の時代となっていた。

さらに１６２５年、赤堀川を３間（約６ｍ）拡幅し、１６５４年、赤堀川の川底を３間掘下げ、遂に本格的に利根川は江戸をバイパスして太平洋に流れ出した。５代将軍綱吉の時代であった。

その頃になって、関東は確実に湿地から農地へと姿を変えていった。

国際灌漑排水委員会の国内委員会「日本の灌漑の歴史」によると、１６００年の日本の農地面積は１４０万haであったが、１００年後の１７００年にはその倍の３００万haに急増している。それ以前の約１０００年間は１２０～１４０万haで横ば

いだったことからみると驚異的な農地の増加であった。

応仁の乱以来、戦国武将たちは農地を巡って戦ってきた。しかし、それはパイの大きさが決まっているゼロサムゲームであった。そのゼロサムゲームの閉塞状況を打破するため、秀吉は朝鮮への侵略を仕掛けて失敗した。

家康は新田開発によって、ゼロサムゲームからの脱皮を図った。全国各地の大名たちも、家康を真似て河川と戦い新田開発を行ったのが江戸時代であった。

しかし、自然の力は底知れない。それ以降も、利根川の洪水は何度も江戸を襲い多くの人命と財産を奪っていった。利根川との戦いは休むことなく継続されて１８０９年、11代将軍家斉の時代、やっと利根川（赤堀川）は40間（約73ｍ）にまで拡幅された。

１８６８年、時代は江戸幕府から明治政府になった。明治政府は江戸幕府の制度をことごとく覆し社会を根本から変革した。しかし、この明治政府も利根川との戦いはそのまま江戸幕府から引き継いだ。

１８７１年（明治4年）、明治政府による利根川（赤堀川）の切拡げ工事が再開された。それ以来、明治、大正、昭和、平成の現在まで引き継がれている。

家康が開始したこの戦いは家康一代では勝利しなかったが、何百年間の戦いでやっと日本はこの関東平野という宝物を掘り当てた。

家康は根っから戦う人だった。生涯の大半を人間の戦いの場で過ごし、人生の終盤では利根川という強力な敵に闘いを挑んでいった。

関ヶ原の戦いで勝利した後、1603年、家康が関西から江戸に飛ぶように引き返したのは、新たな戦いを一刻でも早く開始するためであったのだ。

これが江戸開府にまつわる新しい物語である。

図2では、利根川を東へ導いた「利根川東遷（とうせん）」がはっきり理解できる。関東平野を二つに分けていた下総台地の一番狭い箇所を開削すれば利根川は銚子に向かって流れる。そして、関東は洪水から守られ、新田が生まれていく。

何十年、何百年先の未来の国土を見通し、この河川工事を決断したのが家康であった。

明治の近代日本は、江戸からこの関東平野という遺産を引き継いだ。この関東平野を舞台にして、日本は近代工業国家へ変身した。そして、帝国主義時代の最後の

帝国に滑り込むことで、欧米列国の植民地にならずに現在に至った。

日本史上、最大の国土プランナーは徳川家康であった。